

会員の広場



「 学 び 」

江波西町二丁目町内会副会長 浜本 雅之

大先輩であるが長年遠慮なく親しくさせていただいている香川正弘先生(UEJ理事長、上智大学名誉教授)から「庶民の嗜好性と学習ニーズ」というテーマで数枚書いてほしいとの依頼があったので、学ぶということについて考えてみた。

1. 学ぶとは

学ぶとは生きていくため、また人生、社会をより楽しく豊かなものにするために、知識を身に着け洞察力を涵養していくことだと思う。

学びの材料は、一言でいえば日常茶飯事、仕事、余暇、自然のすべてである。人間、社会、自然のすべてが学びの師と言い換えてもよい。問題は学ぶものの心がけである。「三歳の童児に教えられ」との諺は象徴的である。「万象に天意を覚るものは幸いなり」⁽¹⁾という言葉に噛み締めた。

ところで安岡正篤先生によれば、東洋学における思考の三原則は次の三つである。これは学びの手段や目的の考察にあたって大切なことであろう。

- 一、 目先に捉われずできるだけ長い目で見ると
- 二、 物事の一面に捉われず多面的に考える
- 三、 枝葉末節に捉われず根本的に考える

2. 基礎と応用

(1) 基礎固め

学問の基礎は、「継続するは力なり」「学問に王道なし」の段階である。「三日坊主」にならぬよう、達磨大師の面壁九年の行を忘れないようにしたい。

教育者の側から見た場合に忘れてはならないのは、「憤せずんば啓せず、排せずんば発せず」⁽²⁾あるいは「啐啄動機」であろう。ただし、今大活躍中の囲碁棋士井山裕太五冠は師匠の石井邦生九段に千局(多くはインターネットを介した対局)も手合せしてもらったそうである。子弟のあり方も様々であり、人を見て法を説けと言うことでもあろう。

(2) 応用

基礎に続く応用の段階は、世阿弥の言葉を借りれば、基本を学ぶ「守」の段階を経た「破」、「離」である。応用も高次の段階に行くほど独自のセンスや創造力が必要であることは、「破」、「離」の表現に見事に示されている。

そこで思い出すのが、「菊根分けあとは自分の土で咲け」という句。吉川英治がある結婚披露宴の席で花嫁に手向けた言葉として有名である。

3. 庶民の生活と学び

仕事が終われば赤提灯で一杯。休日には家族と寛ぎ趣味を楽しむ。豊かで成熟した時代を迎えて、昨今、スポーツや自己啓発などのバリエーションも増えてはきたが、仕事や余暇あるいは家族との係わりに庶民が望むところは、基本的には大きく変わっていないのではなかろうか。

先にすべてが学びの材料だと述べたが、換言すれば人生そのものが学びの連続である。仕事は生活の糧を得るだけのものではなく学びの場でもある。余暇も例外ではない。談論、スポーツ、趣味・稽古事、読書、芸術、音楽、新聞、テレビ、映画、動植物、旅行・散策等、これらからどれだけ沢山のことを学ぶことか。

4. 大学開放への期待

昔から庶民は、いわば娑婆大学の学生である。一方、「生涯教育」や「大学開放」が提唱されて久しい。この庶民の学習に「生涯教育」や「大学開放」が適ったものとなっているか。香川先生から頂いた「庶民の嗜好性と学習ニーズ」というテーマにはこのような意味合いが込められていると思うので、大学開放について少し考えてみる。

大学そのものの増加や社会人大学の充実、公開講座、産学連携、大学出版会からの出版、あるいは大学ということをしりぞけて専門学校の増加、大量の書籍出版や公立図書館の充実等により、大学はすでに十分開放されているというのが率直な私の感想である。

それでは大学開放の質はどうであろうか。庶民のニーズに応えるものとなっているか。これについても、大学の学部構成、公開講座のテーマ、産学共同で取り組む課題、出版される本のテーマ等の中に自ずと反映されているのではないか。

このような状況のもと、大学開放における百尺竿頭の一步に何を望むか。一つのヒントはUEJのホームページに示されている社会貢献、地域活性化であろう。ただし、大学の本来の使命は教育、研究であり、その究極の目標は社会貢献にあると思われるのに、今なぜ大学の使命として社会貢献が強調されているのかとの疑問は起こる。従来以上に社会貢献や地域活性化につながる実学的、具体的な提言が求められているということであろう。そしてその背景には成熟社会⁽³⁾などの言葉にも示されているような社会の変化があるように思われる。

そのような時代の庶民の(学習)ニーズは、テレビ、新聞、雑誌、インターネットなどでも拾うことができると思うが、私が日頃思っていることをいくつか挙げてその具体例の紹介に代えたい。

- ・ 社会の大きな変化を迎え町内会や民生委員の制度も見直しが必要ではないか。特に後者は、大家族制の崩壊や独居世帯の増大など、地域のコミュニティの大きな変化により、制度発足時に比べ負担が増大している。
- ・ 私の住むのは広島市を流れる太田川の河口部。子供の頃は、アサリやマテ貝を採り、ごかいを掘って沙魚など釣って遊んだが、護岸工事で干潟の多くは消滅した。時代を遡れば戦前は海苔もうなぎもよく採れたらしい。大正11年生まれの話によれば、「子供の頃、干潮の時にゆっくり川に裸足で歩いて入り、砂に潜っている鰈を踏んだことがある」。護岸工事と干潟など、なかなか両立しがたい問題もあるが、二、三百年かかってもよいから昔の豊かな自然を取り戻したい。
- ・ 牡蠣は広島の名産であるが、牡蠣打ち(殻を割り中の身を取り出す作業)は重労働なので、何とか機械化できないか。また、牡蠣殻の処分も一苦勞なので何か利用できないか。

おわりに

学ぶということを改めて考えてみて、自らがいかに学ぶことより遊ぶことに重点をおいているかを改めて反省させられたが、自然や古今の人間が接して学ぶことは、世界遺産の鑑賞にも似たところがあると思う。「学びて時に之を習う。亦説ばしからずや」の境地に少しでも近づきたいものである。

注

(1) 万象天意

パナマ運河の建設や信濃川の改修工事などに携わった土木技術者、青山士(あきら)の言葉が信濃川の河川敷に碑文として残っている。曰く、「万象に天意を覚るものは幸なり」。人間も自然の一部であることを忘れず、万物から学んでいきたい。

(2) 憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず

論語の言葉であり、略して啓発と言う言葉で日常よく使われているが、その意味するところは、本人が一人で色々考えてもどうしても答えが見つからず苛々しているような状況でなければヒントや答えを与えないということである。本人がじっくり考えもしないのに安易に教える場合と比べると効果の違いは容易に想像できる。ただし、「啓発」ではこの本来の意味合いが分からなくなっている。学ぶ者も教える者も「憤悱啓発」ということを大事にしたい。

(3) 成熟社会

量的拡大のみを追求する経済成長が終息に向かう中で、精神的豊かさや生活の質の向上を重視する、平和で自由な社会。

[イギリスの物理学者ガボール(Dennis Gabor, 1900-79) の同名の著書から] (ウィキペディアより引用)

浜本 雅之 (はまもと まさゆき)

1955年、広島県生まれ。東京大学法学部を卒業後、1979年中国電力(株)入社。1907年、同社早期退職。趣味は釣りと囲碁。現在、江波西二丁目町内会副会長。